

免許法認定通信教育－視覚障害教育領域－
視覚障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目

重複障害教育Ⅱ（実践編）



独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

（作成者：金子 健）

（協力者：東京都立八王子盲学校

石沢 直子）

1

 独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

みなさん、こんにちは。

重複障害教育Ⅱ（実践編）を担当する国立特別支援教育総合研究所の金子健です。
どうぞよろしくお願いいたします。

本講義のポイント

1. 盲学校で行われている重複障害教育の実践について知る。
2. 視覚障害を伴う重複障害児・者の学校教育に携わるときのヒントを得る。

本講義のポイントは、二つです。

一つ目は、特別支援学校(視覚障害)(以下では、「盲学校」としますが)、この盲学校で行われている重複障害教育の実践について知る事、

もう一つは、視覚障害を伴う重複障害児の学校教育に携わるときのヒントを得ることです。

本講義の内容

- I. 教育課程について
- II. 実態把握について
- III. 指導の実際①－教材・教具を用いて－
- IV. 指導の実際②－言葉の学習－
- V. 教室の環境作り
- VI. まとめ

これから、I. 教育課程について、II. 実態把握について、III. 指導の実際①－教材・教具を用いて－、IV. 指導の実際②－言葉の学習－、V. 教室の環境作り、VI. まとめの順でお話します。

I . 教育課程について

4

では、最初に「I . 教育課程について」です。

重複障害の場合の教育課程

- 単一障害の場合
「準ずる教育課程」
- 重複障害の場合
「下学年(学部)適用の教育課程」
「特別支援学校(知的障害)代替の教育課程」
「自立活動を主とした教育課程」

盲学校の教育課程として、視覚障害の単一障害の場合は、小学校、中学校、高等学校と同じ教育課程として「準ずる教育課程」があります。ただし、盲学校を含めた特別支援学校では、小学校、中学校、高等学校の教科等の他に自立活動があります。

一方、視覚障害以外に、他の障害も併せ有する重複障害の場合の教育課程としては、「下学年(下学部)適用の教育課程」、「特別支援学校(知的障害)代替の教育課程」、「自立活動を主とした教育課程」があります。これらが、重複障害学級の教育課程となります。

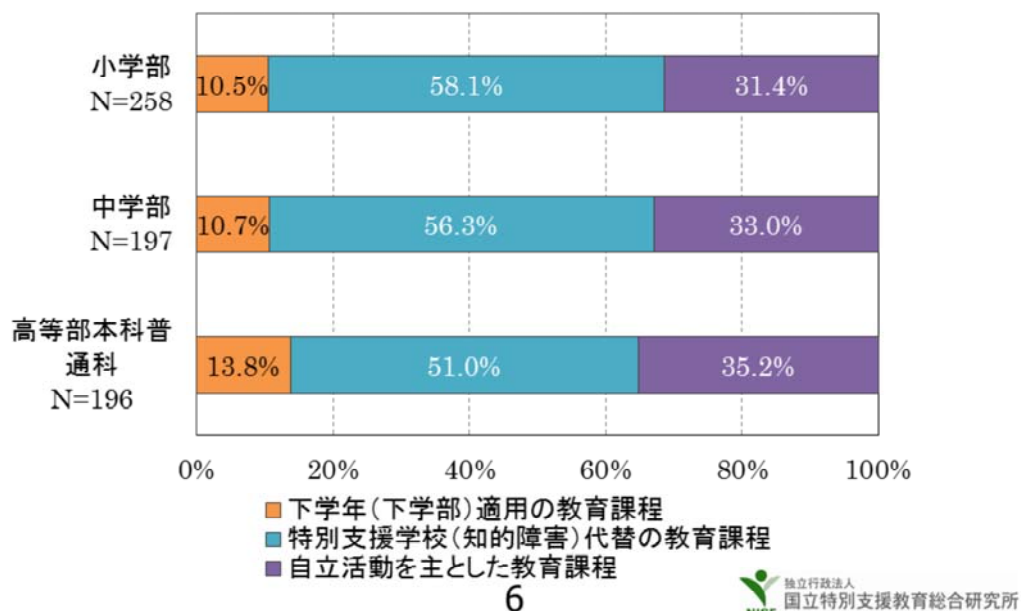
「下学年(下学部)適用の教育課程」は、各教科の各学年の目標・内容の全部又は一部を、当該学年の前学年の目標・内容の全部又は一部によって替えるものです。

「特別支援学校(知的障害)代替の教育課程」は、各教科又は各教科の一部を、特別支援学校(知的障害)の各教科又は各教科の一部と代替するものです。

「自立活動を主とした教育課程」は、各教科の目標・内容の全部又は一部を自立活動に替えて指導するものです。

また、知的障害の有無によって「準ずる教育課程」と「知的障害を併せ有する児童・生徒の教育課程」の2つの教育課程を編成し、後者を重複障害学級の教育課程とする場合等もあります。

重複障害の場合の3つの教育課程 (国立特別支援教育総合研究所、2018より)



国立特別支援教育総合研究所が、平成29年度に実施した、全国の盲学校を対象とした調査では、スライドにお示ししているように、重複障害の場合の教育課程として、小学部、中学部、高等部普通科とも「特別支援学校(知的障害)代替の教育課程」の割合が高く、それぞれ、58.1%、56.3%、51.0%でした。次いで、同様に「自立活動を主とした教育課程」の割合が高く、それぞれ、31.4%、33.0%、35.2%でした。

Ⅱ．実態把握について

7

次に、「Ⅱ．実態把握について」です。

実態把握で大切なこと

- やりとりの道具としての教材・教具
言葉でのやりとりが難しい時、子供の様子を知る道具として使う。
- 保護者の言葉を聞くこと
重複児童・生徒の学校教育は特に家庭との連携が不可欠である。

重複障害教育Ⅰ（概論）でも実態把握について取り上げましたが、障害種別にかかわらず障害の重い子供の場合、言葉でのやりとりが難しいことが多いため、教材・教具を使ったやりとりによって実態把握を行っていくことも重要です。

そのためには、予め教材・教具を用意する必要がありますが、ここでは、何かができるようになることが目的ではなく、それを使ったやりとりを通して子供の実態を把握することが大切です。

また、保護者の言葉を聴くことも大切です。子育てについては保護者が専門家であると言えます。その保護者からの情報は実態把握において大変重要です。

長い時間、子供と関わってきたのは保護者の方々ですので、その言葉は、実態を把握するうえでとても大切です。

教材・教具について

- 型はめ
- 棒さし
- 玉(おはじき)いれ
- タイル等、数の教材
- リベット点字
- 1日の予定ボード等

担当が決まった → すぐに準備

教材・教具については、担任が決まったらすぐ準備を始める必要があります。
前担任の使っていた教材・教具、その児童・生徒の資料を参考に用意しましょう。
これらの教材・教具の詳細については、指導の実際のところで説明します。

保護者の言葉を聞くこと

日常的には

- ・連絡帳
- ・日々の送り迎えの時の会話等

引き継がれる資料として

- ・「個別の教育支援計画」
- ・「個別の指導計画」

保護者の言葉を聞くことについては、日常的に色々な場面を捉えて聞くことができます。

毎日やりとりしている連絡帳、日々の送り迎えの時の会話等、大事に考えて下さい。

着替えや食事、トイレと言った日常生活の指導は、家庭との連携が無くては難しいことです。

先ほどもお話ししましたが、子育てにおいては、保護者が専門家であると言えます。常に保護者から学ぶ姿勢が必要です。

それから、学校で引き継がれる資料としては「個別の教育支援計画」、「個別の指導計画」があります。なお、これらについては、各自治体で名称が異なることもあり、例えば東京都では、それぞれ、「学校生活支援シート」、「個別指導計画」とされています。

作成の目的は異なりますが、どちらも作成時、個別面談等で家庭からの要望や意見を聞くことができます。

これらについては、次で取り上げます。

個別の教育支援計画

教育、医療、保健、福祉、労働等の関係機関が連携協力して支援するために乳幼児期から学校卒業後までを見通した視点を持って作成する

まず、個別の教育支援計画についてお話しします。

障害のある子供に関わる、教育、医療、福祉等の支援機関の関係者、そして、保護者が、子供の障害の状態等に関する情報を共有化し、教育的支援の目標や内容、関係者の役割分担等について計画をつくるものです。

毎年、年度当初に、保護者に聞き取りをして必要な部分を書き加え、年度末には、その年度の様子や来年度への引き継ぎをまとめる等のことも重要です。

個別の指導計画

学校の教育課程において、幼児・児童・生徒一人一人の障害の状態等に応じたきめ細やかな指導が行えるよう、指導目標や指導内容・方法を具体的に示した指導計画

⇒ 保護者に説明、意見聴取
学期末に評価を保護者に返す

個別の指導計画については、年間指導目標を軸に各教科等の目標を具体的に立てて作成します。

学校の教育課程において、幼児・児童・生徒一人一人の障害に応じたきめ細やかな指導が行えるよう、指導目標や指導内容・方法を具体的に示した指導計画です。

学期初めに作成して、保護者に説明し、その意見や要望も聞いて作成することも大切なことです。

各学期末には、評価を記入し、保護者へ結果を返します。

Ⅲ. 指導の実際① ー教材・教具を用いてー

（以降のスライドで紹介する教材・教具は、平成28年度に
東京都立八王子盲学校から情報提供をいただいたものです。）

「Ⅲ. 指導の実際①ー教材・教具を用いてー」についてです。

なお、以下の教材・教具については、全て東京都立八王子盲学校で使用されている
ものです。

1. 手指を意識的に使うための教材
2. 数の学習のための教材
3. 点字の初期学習のための教材

教材・教具を用いての指導の実際については、1. 手指を意識的に使うための教材、2. 数の学習のための教材、3. 点字の初期学習のための教材の順に説明します。

1. 手指を意識的に使うための教材

- 玉(おはじき、コイン)入れ
- 棒抜き(さし)
- 型はめ

物を意図的に持って、位置や方向を定め、置く(抜く)ことが明確に実感できる。

穴の形状や大きさ素材等、変化させることで様々な学習に発展させていくことができる。

- 日常生活品の使用

「触覚」は、目が見える場合の学習では、その役割はあまり大きな関心をもって考えられていません。

しかし、視覚に障害がある場合は違います。手は目に代わる情報を得るための大事なツールです。

積極的に物を触り、何かをすることのできる手に育てていくことが大切です。一方、重複障害の子供は、手指を使うことが苦手な場合があります。

そのために、いろいろな教材・教具を使って意識的に手指を使う学習を進めることが大切です。

玉入れ、おはじき入れ、コイン入れ、棒抜き、棒さしは、物を意図的に持って、位置や方向を定め、置いたり、抜いたりすることが明確に実感できる教材です。

型はめは、それに弁別の要素が加わります。

これらの教材は、穴の形状や大きさ、素材等を変化させることで様々な学習に発展させていくことができます。

また、日常生活品も教材として活用できます。

- 物に触りたがらない場合は？
 - どのような物なら触るか？
 - どのような状況なら触るか？
- 子供の自主性の尊重

物の特性として、触覚的に入手される各種の特性

- 触感(手触り)
- 硬さ(柔らかさ)
- 温度(温かさ、冷たさ)
- 形
- 大きさ
- 太さ
- 厚さ
- 重さ
- 振動

等



どの特性が要因となって触り易かったり、触り難かったりするのかを検討する

16

なお、こうした教材で学習を進めようとしても、子供によっては、そもそも、全般的に物に触りたがらないということもあります。

この場合は、まずは、どのような物であれば触るかを観察することが大切です。日常品や玩具で特定の物なら触るのか、食べ物なら触るのか、あるいは、物の触覚的な特性について、どのような触感(手触り)、硬さ(柔らかさ)、温度の物なら触るのか等、丁寧に観察することが大切です。まずは、触れる物からはじめて、それに特性が類似したものへと触れる対象を広げていくことが考えられます。

また、保護者と一緒なら触る、食事の場合には触る等、状況による違いもあり得ます。これについても、その状況からはじめて、他の状況でも物に触れるようにしていくことが考えられます。

また、こうした教材による学習を進めるにあたって、子供の自主性を尊重するという視点が大切です。触って欲しい、操作して欲しいと考えるあまり、子供の自主性やペースへの配慮に欠けることがないよう、留意することが大切です。視覚に障害がある場合は、様々な場面で受動的に行動することになることも多いため、一層、その主体性を尊重し、子供が積極的、能動的に行動する場面を作っていくことが大切です。

玉(おはじき、コイン)入れ



コイン入れ



おはじき入れ



瓶を使ったビー玉入れ

17

独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所
NISE

玉入れ、おはじき入れ、コイン入れは重複障害のある子供の初期的な学習として、よく使われます。

玉入れは、玉やボールを持って缶に入れるものですが、そのことは何でもないので、ようにできてしまう子供もいますが、非常に難しいこともあります。

物を落ちないように手で持って、ひじや肩等に適当に力を入れて移動させる。

それには、力のコントロールも必要になってきます。

それに加えて、手に持った物を放すためには、手に入れている力を抜く必要がありますが、いったん入れた力を抜くことはとても難しいことがあります、この力のコントロールも課題となります。

さらに、このスライドで示しているコイン入れやおはじき入れは、それらを入れる穴を貯金箱の投入口のように開けた教材ですが、これが横であればすぐ入っても、縦に置くと途端に難しくなることがあります。この場合、手首をひねる動作があるからです。

また、瓶を使ったビー玉入れは、入った時、カランと音がするので、楽しめる教材です。

また、瓶が細長いのでビー玉を持たない方の手で押さえるという課題が加わってきます。

棒抜き(さし)

* 抜きさしするものとしてはパイプや玉



18

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

棒抜きについては、棒からパイプや玉を抜き所定の場所に置くものですが、初め短い物からだんだん長い物にして行きます。

抜いたものを置く場所を決めておくことも大事です。

上方向へ手を動かし、抜くことができるようになったら、次に棒にさすことへと進んでいきます。

パイプや玉を持って、方向を定めて棒にさすという課題になるので抜くことよりも難しくなります。

棒抜き

一列に並んだ丸いウッドビーズを外す



19

独立行政法人
NISE
国立特別支援教育総合研究所

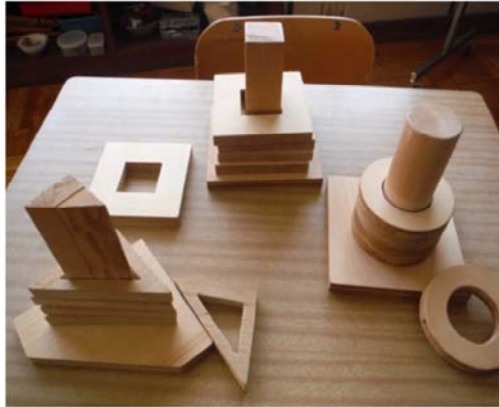
スライドに示したのは、一列に並んだ丸い玉のウッドビーズを棒から抜く課題です。
10個並んでいるので、右から順番にはずしていくと、数の課題にもなります。

ただし、子供によっては、この教材を用いた課題は、あくまで棒抜きの課題で、数の学習ではないと考えて、数の学習には応じないということもあるようです。そのような場合は、数の学習にもなると考えて進めるのではなく、数の学習については他の教材を用意する等の配慮が必要です。

教材はこうでなければならないと決めつけず、子供とのやりとりの道具、子供からの発信を見つけるツールとして活用することも大事です。

棒さし

丸、四角、三角



20

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

このスライドで紹介するのは、弁別の要素が入ってくる棒さしです。

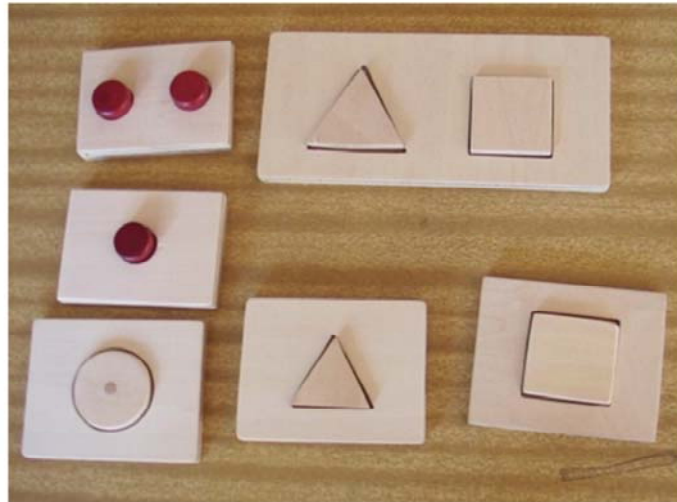
丸、四角、三角を触って同じ型の棒にさす課題です。

この場合、高さがあり、形の板を水平にすることも必要なため、教材を両手で操作することも必要な課題です。

そのためもあり、ここでは滑り止めのマットを敷いています。棒の方が動いてしまうと操作が難しくなりますので、このような配慮も必要です。

このちょっとした工夫が、教材の操作をずっと楽にできるようにしてくれます。

型はめ



21

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

スライドに示したのは、丸、三角、四角等の型はめ教材です。枠の板の輪郭線とはめる板の輪郭線の「同じ、違う」を区別する課題です。

はめる形がピタッと枠の板にはまるものが、市販のものには多いようです。

この場合、はめた後、形を確認することができません。

少しだけ、形をはめた後、手で触って確認ができるよう、はめる板の方を枠よりも高くしておきます。

ただし、ピタッとはまる方が好まれる場合もありますので、子供の好みに合わせて作ることも大切です。

日常生活品の使用



22

独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所
NISE

このスライドは、日常生活品を使つての教材です。

左は、お弁当等に入っているお醤油の容器(「たれびん」)を使つて、ふたの大きさの弁別と指先の操作を伴う教材です。

2種類の、大きさの違うたれびんのふたと容器をトレイの中から選択して、ふたを閉じる課題です。

右は、洗濯バサミを使った教材です。

はずしてはめるという単純な動作ですが、これも指先を意識して使うことになる教材です。

2. 数の学習のための教材

数系列としての数(数唱するもの) 「1、2、3…」

量としての数(かたまりとしての数) 「1個」「2個」「3個」 …

操作を伴うと実感しやすい

タイルの利用

- ・加工がしやすい
- ・同じ大きさが大量に手に入りやすい



23

独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所
NISE

続いて、数の学習のための教材を紹介をします。

数については、数系列としての数と量としての数があります。

前者は、「1、2、3、4、5…」と数唱するもので、後者は、「1個」「2個」「3個」…と数をかたまりとしてとらえるものです。

いずれにしても、移動等の操作を伴うと実感しやすいようです。

数の教材としてタイルはよく使われます。

加工がしやすいこと、同じ大きさが大量に手に入りやすいこと等が理由にあげられます。

他に、ウッドビーズやそろばん玉等も用います。

ウッドビーズ

ウッドビーズを移動させながら10までの数唱



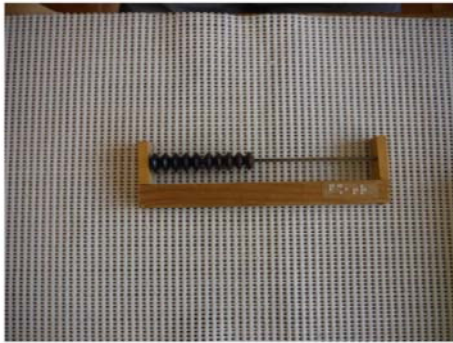
24

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

スライドは、ウッドビーズを用いた課題の例で、ウッドビーズを移動させながら10までの数唱をしていきます。

そろばんの玉

そろばんの玉を移動させながら10までの数唱



25

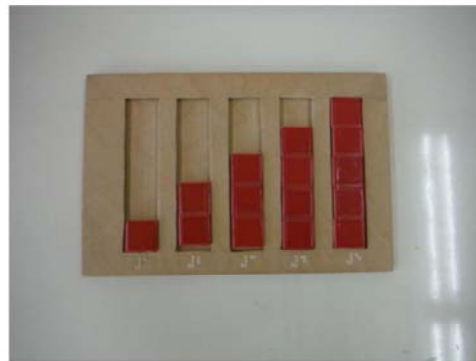
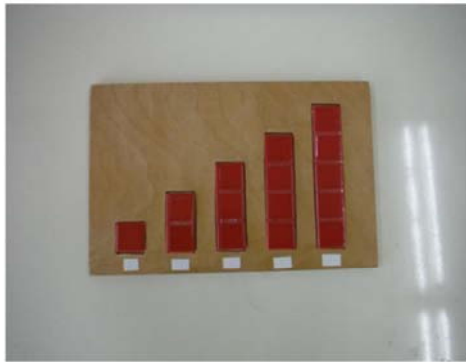
独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

このスライドは、そろばんの玉を用いた課題の例で、そろばんの玉を左から右へ移動させながら1から10の数の数唱をしています。

なお、この教材は、足し算、引き算の確かめに使うこともできます。

タイル①

1～5について、固まりとして扱う



26

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

次に、タイルを使っの数の学習を説明します。

このタイルを使っの数の学習に入る事前の段階としては、数唱で大人と一緒に10個のものを数えることができる、大小の型はめができること等を想定しています。

このスライドの左は、はめ板のそれぞれの枠に合った、1個から5個までの固まりのタイルを入れます。

2個から5個のタイルは、それぞれ、くっつけて固まりにしてあります。

最初は、子供に、大きい順でタイルの固まりを手渡し、入れさせます。

できるようになったら、バラバラに置いてあるものに触らせて入れさせます。

最終的には、左の1から順に右の5まで入れられるようになるのが目標です。

右は、枠を同じ長さのものに変えたものです。

この枠に対して左の1から順に右の5まで入れられるようになるのが次の目標になります。

ただし、隙間があるのは納得できないという別の理由で達成できない場合もありますので、子供の特性をしっかりと見て課題に取り組ませることも大切です。

タイル②

5までの数の合成・分解



27

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

続いて、5までの数の合成・分解の教材です。

2つの枠が並んでいるはめ板の片側に5の固まりのタイル、片側にバラのタイルを入れておきます。

そして、合計で5にするために右から固まりのタイルを選ばせます。

こうして、いろいろな操作を体験することで、1～5の数の意味が分かっていくものと考えられます。

3. 点字の初期学習のための教材

リベット点字

マッチング(見本合わせ)教材として使用
見本にあわせてリベットをさす
50音をア行から順番に並べてたどる



リベット点字と点字
ア行から行ごとに並べたもの



リベット点字
1文字ずつのもの
28

リベット点字
リベットをさす

独立行政法人
NISE
国立特別支援教育総合研究所

次は、点字の初期学習のための教材を紹介します。

リベット点字は、点字の6点の位置に穴をあけて、そこにリベットをさせるようにしたものです。

6点が際立つため、点字学習の導入に使われます。

見本と同じリベット点字を選択するマッチング(見本合わせ)教材として使用したり、見本と同じにリベットをさす教材として使用します。また、50音の順に並べて、それを順に触るという使い方もします。

なお、ここでのリベット点字は、縦2センチ、横1.5センチの大きさです。

マッチング(見本合わせ)教材 二者択一



五者択一



50音表の中からの選択



29

独立行政法人
NISE
国立特別支援教育総合研究所

マッチング教材(見本合わせ教材)は、視覚の使える場合の、同じ絵カード同士を合せる絵合わせや、同じマークや絵、文字を線で結ぶ線結び教材に当たります。

まず、スライドの上に示しているように、二者択一マッチングを行います。下の見本と同じ文字を上の2つのうちから選択する課題です。

この場合、初めは「め」と「あ」のように点の対比のはっきりした文字から始め、次第に色々な点字を使っていきます。

二者択一ができるようになったら、課題のレベルを上げていきます。スライドの下では、五者択一マッチングとして、五つの選択肢の中から選ぶものに変えています。

下の見本を触り、上の5つの選択肢を触ったあと、見本と同じものを選択し、見本の隣に並べ、合っているか確認する課題です。

これらの課題が出来るようになったら、右のように清音50音表の中から文字を選択する課題へと進むことができます。

物と点字のマッチング



「てぶくろ」を触り、てぶくろ（点字）を五つの点字の中から選択する

30

 独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

物と点字のマッチングは、具体物を触ったあと、点字シールをはった五つの木片の中から、その物の名前を選択する課題です。

このスライドにある手袋を、名前を選択した後、実際に手にはめてその物の使い方を確認するという方法もあります。そうすれば、物の名前と共に、その使い方等を教えることにもなります。

手袋の場合は、それが「てぶくろ」であり、手にはめるものだということの理解につながります。

なお、ここでの点字シールは大点丸という、標準の点字サイズよりも少し大きめに点が打てる点字器を使用して作っています。点字学習の初期には、このような大きめの点字を使用することが有効な場合があります。

指の運動

指の運動の分化

指をバラバラに動かすために



歌に合わせて指の体操



歌に合わせて、パーキンスブレイラー
(点字タイプライター)に紙を入れる

31

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

指の運動の分化は、とても大切です。

点字学習に入る前には、ある程度出来ていることが大事なのですが、重複障害の場合は、指の分化の発達に遅れがみられ、点字学習の中で同時に進めていくことが必要なこともあります。

子供によっては、ジャンケンの形が指で出来ない、指がバラバラに動かせない等のことがあります。ただし、だから点字の学習は早いと考えるとずっと点字は無理ということになってしまいます。

一方、「点字を学習しよう」とやみくもに子供の手を取って動作を教えるのもよくないので、例えば、子供の動作に歌を添えるというやり方もあります。

スライドの左では、「グーチョキパーで」等の歌詞で使われている旋律で「人差し指あげましょ あげて あげて おろして」といった歌にして、指を動かすようにしています。

右は、パーキンスブレイラーに紙を入れているところです。

そのためには、つまみをつかんで回す必要があります。ここでも、その操作に対して歌を添えることは有効です。

パーキンスブレイラー(点字タイプライター)の利用

- ・パーキンスブレイラーの使用
キーを押すことで点字の形(凸状)で現れる
- ・電動パーキンスタイプライター
指の力の弱い子供でも点字が打てる



32

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

パーキンスブレイラーは、点字を作成するためのタイプライターですが、6つのキーが、それぞれ点字の6点に対応しています。

リベット点字である程度マッチングが出来るようになった重複障害の子供には、点字を書く道具としてとても大切です。

点字板のように、打った点が通常と逆の凹となるのではなく、キーを指で押すことで点字が紙の上に通常の凸の形で現れます。従って、その場で点字を触って確認することもできます。

1の点は「あ」。1、2の点は「い」。1、4の点は「う」というように番号でキーを押す練習をしていくと指の分化にもつながります。

なお、電動のパーキンスブレイラーもあります。この場合は、弱い力でも点字が打てますので、指の力が弱い場合に有効です。

IV. 指導の実際②

－言葉の学習－

33

「IV. 指導の実際② 言葉の学習」についてお話しします。
ここで取り上げる実践についても、東京都立八王子盲学校での実践です。

歌あそび 「あいうえ大きなおかしだな」

- 歌うときの喉の振動を楽しむ
- 「あいうえ大きなおかしだな」（パネルシアターの創始者 古宇田亮順作詞）
- 「一本橋こちょこちょ」や「でこちゃんはなちゃんきしゃぽっぽ」等のわらべ歌、触れる遊び歌

言葉の学習について、まず、直接、子供と触れ合う歌あそびを紹介します。

盲ろう児とのやりとりでは、盲ろう児が触覚を使うやりとりとして、教員が歌を唄い、その喉を子供が触って振動を楽しむというやりとりがあります。

例えば、「あいうえ大きなおかしだな」という歌では、音形が単純で言葉遊びの様にア行からワ行まで繰り返すという特徴をもちます。

このような歌を教員が歌い、子供が、その喉に手をおいて振動を楽しみます。楽しんでいるというのは、例えば、その子供が笑顔を見せているということで分かります。

この他にも「一本橋こちょこちょ」とか「でこちゃんはなちゃんきしゃぽっぽ」とか、いろいろな古くから日本に伝わるわらべ歌、触れる遊び歌等たくさんあります。

いずれも優しく子供の顔や手に触れながら拍を刻み、歌い聞かせることができます。

柔らかな触れあいを通したやりとりに、わらべ歌や、触れる遊び歌はとても有効です。

盲ろう児のコミュニケーション 「伝わるサイン」

- 伝わるサイン
 - ・ 触手話
 - ・ 触指文字
 - ・ 指点字、点字
 - ・ 身振りサイン
 - 「お父さん」「お母さん」「おしまい」「名前」「一緒」
 - 「わかった」「もっとやって」「ちょうだい」「座る」
- 子供からのサインについて
上記のような明確なサインの他

表情の変化、しぐさ等の小さな動きを見逃さないこと

ここで、盲ろうの子供のコミュニケーションについての実践を紹介します。

盲ろうの子供の場合、周りの様子が見えない、周りの様子が聞こえないことで、周囲の人とのコミュニケーションには大きな困難が伴います。

しかし、ここで、お示ししているような、触手話、触指文字、指点字、身振りサイン等、こちらから盲ろうの子供に「伝わるサイン」があり、向こうからこちらに「発信されるサイン」もあります。

一方、一人一人の状態は違いますので、それに合わせて、一つずつ共通の理解を子供とともに作っていくことが大切です。この一つずつのために十分な時間をかけることも必要になります。

なお、上記のような明確なサイン以外に、子供から発信されている、表情の変化、しぐさ等の小さな動きを見逃さないことが大切であり、そこから共通の理解と信頼関係が生まれコミュニケーションへとつながります。

コミュニケーション手段を伝えるために サイン表

- はじめに、肩をトントンとたたき、呼びかけをして下さい。
 - ・次に(できたら左のてのひらに)あなたのお名前を指文字で伝えて下さい。
 - ・握手(あいさつ)をして下さい。
 - ・それから、何をするのか伝え、行動に移して下さい。

* おねがい
側を離れるときは必ず
＜まっいて＞の
サインをお願いします。

＜まっいて＞のサイン



36

独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所
NISE

担任とのやりとりが成立するようになったら、次は人間関係を広げていく必要があります。

そのためには、その子供のコミュニケーションの方法を関わる人に覚えてもらい、使ってもらわなければなりません。

大事なのは、子供が周囲に合わせるのではなく、子供に合わせて周りがあるコミュニケーションの方法に近づいていくことです。

このスライドに示しているのは、一人の盲ろうの子供の身振りサインのサイン表です。









最初にあるのは、コミュニケーションを始める際の方法です。

肩を叩いて呼びかけること、次いで、手のひらにこちらの名前を指文字で示すこと、握手をすること、それから何をするかを伝えて行動に移ることを書いています。

これを作る時、母親から「まっいて」のお願いも最初に入れてほしいと言われたそうです。

その際、「この子はちょっとでも人が離れてしまうと、どんなに周りでもぎやかにおしゃべりしていても何も分からない。その距離がたとえ50センチでも、10メートルでも離れていたら同じだ。だから、離れるときは必ず『まっいて』のサインを出してほしい。そうでないとこの子は何も分からないまま、いきなり一人ぼっちになってしまう。それがこの子の中で当たり前になるのが嫌なんです。」と言われたそうです。

活動の時によく使うサイン

次は	どっち？	始めましょう	おわり
			
下に向けた手の平を上に向けて。 ズボンは足で同様に。	並べた人差し指を交互に上下に動かす。	両方の手を立て、幕が開くように左右に動かす。	手の甲を手の平で2回なぞる。
脱ぐ・着る	用意・準備	もう1回	ちょうだい
			
脱ぐときは腕を上から下に、着るときは下から上へなぞる。ズボンは足で同様に。	両手の平を向かい合わせ、左から右へ動かす。	手の甲に指先の方へ「1」を書く。(遊んでいるとき、終りの前に「あと1回ね」で使うと有効)	持っている手の下へ、手の平を上に向け重ねる。

サイン表の続きとして、活動の時によく使うサインを、スライドに示しました。全て、こちらから、その子供に伝えるものですが、その子供に伝わるサインです。

子供を取り巻く世界を広げていくことは大切なことです。卒業後の豊かな社会生活にもつながっていきます。

そのためにコミュニケーションの方法を共有し、学校であれば、その子供に関わる全ての教員、寄宿舎指導員等が共通に理解し、接することが出来るようになることが大切です。

活動の時によく使うサイン		〇〇さんからのサイン	
立つ	座る	もっとやって欲しい	ちょうだい
両膝を2回たたく。	お尻をたたく。	自分の胸をたたく。	手の平を上にし、重ねる。
上がる、下がる	曲がる	トイレ	終わり
(上り・下り)つないだ手を軽く(上または下)に振る。 段の終わりで手を軽く握る。	曲がる方向に手を軽く振る。	股をたたく。	左手の甲を、右手の平でなぞる。

38

独立行政法人
NISE
国立特別支援教育総合研究所

続いて、このスライドの左に、活動の時によく使う、動作を促すサインを示します。右には、その子供からのサインを示します。

ここでは、盲ろうの子供の例を示しましたが、以上のようなサインは盲ろう以外の視覚障害を伴う重複障害の子供の場合にも使われるものがあります。

ただし、盲ろうの場合を含めて視覚障害を伴う重複障害の子供のコミュニケーションの方法は様々です。

一人一人が可能な方法を、感覚や認知の特性等に合わせて考えていく必要があります。教材教具や歌遊び等を通したやりとりの中でお互いに育んだコミュニケーションの方法も大切です。

V. 教室の環境作り

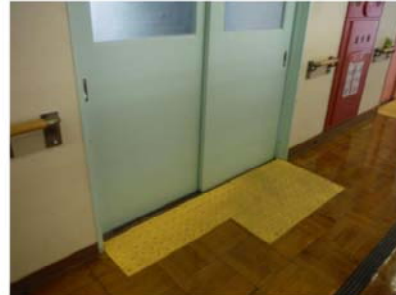
40

次に、「V. 教室の環境作り」についてです。

ここで紹介している教室の環境についても、東京都立八王子盲学校での例です。

入りを分かりやすくするための工夫

- ・ 教室の入り口
音のなるベルをつけている



- ・ トイレの入り口
生徒が使うトイレの床に点字ブロックのシートを貼っている

41

 独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

このスライドの左では、子供が手すりを伝って歩いたとき自分の教室であることに気付くよう、教室の入り口に音のなるベルをつけています。

右では、重複障害学級の生徒が使うトイレのドアの前の床に点字ブロックのシートを貼っています。

どちらも一人で移動できるようになることを目指し、手がかりになるように工夫したものです。

教室のマークとして、造花(生徒の好きな花)を使っている



教室に入ってすぐ右にそれぞれの生徒の1日の予定ボードが並んでいる

42

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

このスライドでは、教室の入り口に、そのマークとして花を使っています。生徒の好きな花だそうです。

また、スライドの下にあるように、教室に入ってすぐ右にそれぞれの生徒の1日の予定ボードが並んでいます。

自分で1日の予定がたどれるようにという工夫です。

また、教室の中の環境については、物を置く場所をきちんと決めて子供がたどりやすいレイアウトにすることが大事です。

そして、物の置き場所を決めたらできるだけ変えないことです。

これも視覚障害を伴う重複障害の場合、日常生活の中で自分から動き、できることを増やすための配慮です。

1日の予定ボード



それぞれの授業で個別に分かりやすいマークを作ってカードにしている。

1日の流れを朝の日常生活の時間に確認する。安定し、主体的に学校生活を送るために予定確認は非常に重要。

授業が終わったらカードをかごに入れて活動の終わりを確認する生徒もいる。

43

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

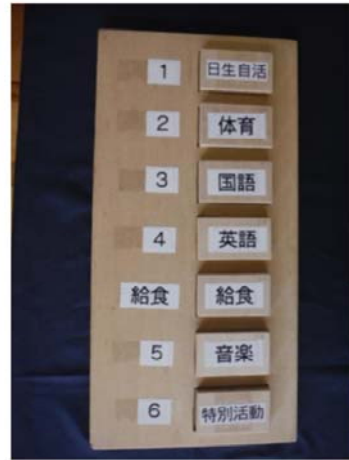
1日の予定ボードについて、あらためて取り上げます。

スライドは、毎日、1日の流れを朝の日常生活の時間に確認している予定ボードですが、これは生徒が安定し、主体的に学校生活を送るために非常に重要なことです。

それぞれの授業で、個別に分かりやすいマークを作ってカードとしており、体づくりの為に走るときに使う伴走ひも、国語のリベット点字等その授業で必ず触るものをマークにしています。

授業が終わったらカードをかごに入れて活動の終わりを確認する生徒もいます。

一人一人に合わせて



このスライドの左は、ある子供に対して小学部4年生の時から使っている1日の予定ボードに、高等部普通科2年の時の担任が、下に板を貼り点字のカードが入るようにしたものです。

小学部から積み上げてきて、点字の理解が進んだということです。

生徒一人一人に作っていますので、学年、学部が違っても子供とともに持ちあがっていくケースがほとんどです。

その時々で、担任が生徒に合わせてリメイクしています。

同じカードを特別教室の前に貼ってマークにしていた場合もあります。

右は墨字(普通文字)で学習している生徒の1日の予定ボードです。ここでは漢字を使用していますが、子供の視力の状況、文字や形の理解の程度等に応じて工夫することが大切です。

チラさわりのすすめ

『見える子は「チラ見」している。でも僕らはそれが出来ない。チラ見に代わる「チラ触り」を小さいうちはいっぱいしていいと思う。』

（ある全盲教員の言葉）

- ・ 意識的に「物、点字をさわる」環境を作る



（電気のスイッチやストーブに点字のテープを貼る）

45

独立行政法人
NISE 国立特別支援教育総合研究所

意識的に「物や点字を触る」環境を作ることも大切です。

視覚に障害のない子供は、周囲の物や文字を自然に見ています。『見える子は「チラ見」している。でも僕らはそれが出来ない。チラ見に代わる「チラ触り」を小さいうちはいっぱいしていいと思う。』 ある全盲の教員の言葉です。

重複障害の子供たちは、自分から物に手を出していくことが少ないので、意識的に触る環境を作ること、とにかく触ることに慣れさせることが大切です。例えばスライドのように、電気のスイッチのそばに「あかり」という点字のテープを貼る等すれば、それに触ることも生じます。

VI. まとめ

この講義は、重複障害教育の実践ということで、

- I. 教育課程
- II. 実態把握について
- III. 指導の実際①ー教材・教具を用いてー
- IV. 指導の実際②ー言葉の学習ー
- V. 教室の環境作り

の五つの項目に分けてお話ししてきました。

このような実践を参考にしつつ、子供一人一人に応じて、工夫し、実践していくことが大切です。

事後学習に関する指導 (子供達から学ぶこと)

1. 子供と一緒に学習することをおして見えてくる変化と課題について、記録をし、検証していくこと
2. 一人一人の子供に合わせた教材・教具の作成、使い方の工夫を検討し、実践すること
「教材に子供を合わせるのではなく、子供に合わせて教材を作り、使い方を工夫する」

事後学習については、二つお示します。

どちらについても、子供達から学び、子供に合わせるという視点が重要です。

まず、子供と一緒に学習することをおして見えてくる変化と課題について常に検証していくことです。

そして、毎日の記録を残しておくことです。この積み重ねのなかでの一人一人の子供に応じた創意と工夫が大切です。

次は、一人一人の子供に合わせた教材・教具の作成、使い方の工夫を検討し、実践することです。

東京都立八王子盲学校の元校長であった後藤新平先生は、「教材に子供を合わせるのではなく、子供に合わせて教材を作り、使い方を工夫する」と言っています。

この後藤新平先生は、盲ろう児の教育の経験者で、その実践が細かく記録されて、次のスライドに示す文献としても残されており、教材も残されています。

過去の教材に学びつつ、子供一人一人に合わせて教材を工夫すること、そして、その教材を後へと伝えていくことも大事です。

参考文献

- 文部科学省(2003)点字学習指導の手引き(平成15年改定版)
- 後藤新平(2009)実践研究論集―退職を迎えて―. 東京都立八王子盲学校
- 後藤新平(2009)視覚・聴覚二重障害児の5年間の記録.
- 国立特別支援教育総合研究所(2018)基幹研究「視覚障害を伴う重複障害の児童生徒等の指導に関する研究―特別支援学校(視覚障害)における指導を中心に―」研究成果報告書.
https://www.nise.go.jp/nc/report_material/research_results_publications/specialized_research/b-330

本講義に関連する文献として、スライドに四つのものを挙げておきましたので、ご参照ください。

なお、「実践研究論集」と「視覚・聴覚二重障害児の5年間の記録」については公益財団法人重複障害教育研究所へお問い合わせください。

免許法認定通信教育－視覚障害教育領域－
視覚障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目

重複障害教育Ⅱ（実践編）

終わり

独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所
（作成者：金子 健）
（協力者：東京都立八王子盲学校 石沢 直子）

49

 独立行政法人
国立特別支援教育総合研究所

以上で、「重複障害教育Ⅱ（実践編）」を終わります。